

申請者： 犬飼 知徳

論文題目 フランチャイズ組織の盛衰メカニズムの解明

審査員 沼上 幹  
青島矢一  
山下裕子

本論文は、フランチャイズ・システムにおけるフランチャイジーの自律性・自由度とフランチャイザーの統制のバランスが、フランチャイズ・システムの成功と衰退にどのような関わり方をしているのかを明らかにしようとするものである。本論文の最も重要な貢献は、この問題を考えるための一般的なフレームワークを、オルソンの集合財の理論とハーシュマンの退出・発言・忠誠心のモデルを応用してオリジナルに構築したことであると思われる。まず通常のハーシュマン・モデルが想定していた顧客→組織という 2 層のフレームワークを、顧客→フランチャイジー→フランチャイザーという 3 層のフレームワークへと改変し、しかもオルソン・モデルを融合するために、中間のフランチャイジーには、(1) 退出（他のチェーンへ移籍）、(2) 無言の自助努力（無言で自分の店舗のオペレーション改善に日々努力する）、(3) 発言①（自助努力で得た現場ノウハウをシステム内に伝播）、(4) 発言②（自助努力をせずにフランチャイザーからの譲歩引き出し目的のシステム内政治活動を展開）という 4 つの選択肢を設定した。このフレームワークにより、初期フェーズでは発言①が多数を占めているシステムも、その後、フランチャイジーが経済的に成功し、高齢化するにつれて、あるいはまた多店舗オーナーとして自ら現場に立たない立場に転ずるにつれて、多くの人々が上記の発言①を行なわなくなり、発言②や無言の自助努力へと行動様式を変化させ、チェーン・システム全体の衰退を阻止し、システムを改善するための重要な情報が生産・伝達されなくなることを説明している。このフレームワークを使った説明の事例として、本論文はモスバーガーのチェーンを取り上げ、詳細に分析し、このフレームワークが現実の事象の説明にも有効であることを示している。

本論文には、まだ荒削りな部分が残っている点や、理論構築作業と事例研究のどちらかに軸足を置いているのかわかりにくいという問題、理論の強みをチェーンの劣化プロセスに限定して向上させていく余地が残されている点、分権的なシステムのもつ強みと弱みのダイナミクスについての一般的な視野の検討など、残されている問題・課題も多い。しかし、このような問題・課題は存在するものの、本研究が構築した理論枠組みは応用可能性の広いものであり、今後の発展可能性の高いものであると高く評価することができる。

よって、審査員一同は、所定の試験結果をあわせて考慮して、本論文の筆者が一橋大学学位規則第 5 条第 1 項の規定に準じた取り扱いにより一橋大学博士（商学）の学位を受けるに値するものと判断する。